

地元ガイドと、世界文化遺産の集落をめぐりませんか

NPO法人 平戸観光ウェルカムガイド（長崎県平戸市）☎ 0950-23-8210



平戸の聖地と集落 早分かりコース※お客様のお車同乗プラン
平戸観光交通ターミナル～生月町博物館「島の館」～ガスパール様(中江ノ島眺望)～かたりな(春日集落拠点施設)～丸尾山～平戸ザビエル記念教会～平戸観光交通ターミナル
¥3,800(大人1名) ¥4,800(大人2名) ※施設入館料・保険料込
約3時間半 申込締切、原則3日前 ☎ 0950-22-3060(平戸観光協会主催ツアー)

地元の観光ガイドなので、他では聞けないような話題が豊富です。
ガイド料は、利用人数に関係なく、2時間まで1500円、1時間延長につき500円となって
います(ガイド1名対応時)。原則、前日までの申込をお願いしています。
施設入館料等は別になります。

NPO法人 黒島観光協会（長崎県佐世保市）☎ 0956-56-2311

黒島の集落 しま歩きガイド

黒島港～黒島神社～本村役所(庄屋屋敷)跡～興禅寺～蕨集落～蕨展望所～

カトリック共同墓地～黒島天主堂～黒島港

¥4,050(大人1名) ¥5,670(大人2名)

約3時間半 申込締切7日前



地元ガイドのほとんどがカトリック信徒です。黒島の昼食には、黒島豆腐、新鮮なお刺身、赤土で育った野菜の煮物はいかがですか。事前予約が必要ですので、詳しくは黒島観光協会HPをご覧ください。黒島天主堂の耐震工事期間は2021年3月(予定)までとなっておりますが、見学台が設置されますので、工事の様子をご覧いただくことができます。

NPO法人 おぢかアイランドツーリズム協会&おぢかガイドの会（長崎県小値賀町）☎ 0959-56-2646



野崎島（野崎島の集落跡）ガイドツアー

野崎港～ビジターセンター～旧野崎集落～野生の鹿が群れる赤茶けた大地

～高台から眺める白砂の浜～自然学塾村～旧野首集落(旧野首教会)～野崎港

¥7,560(大人1名) ¥8,640(大人2名) ※自然学塾村使用料、保険料込

約3時間 申込締切7日前

潜伏キリストンの歴史だけでなく、島の自然、非日常の風景もご覧いただけます。
野崎島ガイドツアー以外にも、「五島列島キリストン物語～野崎島編～」という着地型
プランもございます。旧野首教会の見学をご希望の場合は、おぢかアイランドツーリズム
へ事前にご連絡下さい。

上記ガイドプラン以外にもお客様のご要望に応じてのガイドが可能です。

12構成資産全体に関するガイドについては、NPO法人 長崎巡礼センター（☎ 095-893-8763）にご相談ください。

世界のたからもの

「長崎と天草地方の潜伏キリストン関連遺産」は世界文化遺産に登録されました。2世紀以上にわたる禁教政策の下で密かに信仰を継続した人々の歴史を物語る貴重な証拠として、守り、未来へ引き継いでいくべき「世界のたからもの」であると認められたのです。

私たちが今あたりまえに思っている、信仰の自由、これは簡単に認められたものではありません。弾圧に耐え、祈りをつないだ人たちの存在抜きにしては語れない、「たからもの」なのです。

日本列島西端の地にある構成遺産の集落を訪れて、自由や他者を認め合う心の大切さを、再認識してみませんか。

一緒に信仰を守ってきた子孫で暮らす、春日集落。今も毎朝、祈りが捧げられる黒島天主堂。困難の中、信仰を守り通した記憶が残る、野崎島。いずれもが、平和な時代の尊さを、感じさせてくれます。

発行 長崎県北振興局商工労政課
協力 佐世保市、平戸市、小値賀町

イラスト／にしむらかえ

※掲載内容は、2019年3月現在の情報です。
※ガイド料金については上記時点での消費税8%込みの金額です。
料金は変動する可能性がありますので、予約時にご確認下さい。



世界文化遺産
長崎と天草地方の潜伏キリストン関連遺産
“住む人に誇りを、訪れる人に感動を”

祈りをつなぎ ひとびと

潜伏キリストン

長崎から伝える、平和のメッセージ

平戸・黒島・小値賀 観光ガイド



平戸



戦国時代後期の1550年、キリスト教宣教師フランシスコ・ザビエルが平戸にやってきました。南蛮貿易での利益があると考えた平戸の領主、松浦隆信は、ザビエルに布教の許可を与え、キリスト教に改宗した家臣、籠手田氏の領地を中心に、生月と平戸島西海岸の村々はキリスト教へ一斉改宗しました。春日集落の人々も、この時キリスト教徒になり、集落の丘には十字架が建てられ、教会もあったとの記録があります。



第一部戸氏と共にキリスト教徒に領土で改宗をすすめた。



しかし、時代が変わり、天下をとった豊臣秀吉は、キリスト教布教に伴う様々な出来事に危機感を持ち、宣教師を日本から追放する命令を出します（1587年、伴天連追放令：バテレン＝ポルトガル語で宣教師の意味）。

その後、松浦隆信が亡くなり、子の鎮信の代になると弾圧が強まり、籠手田氏は身近な関係者を連れて長崎方面に去ることになり、残ったキリスト教徒達は庇護者を失いました。つづく江戸幕府も支配を確実にするため、全国的にキリスト教を禁じ、取りしました。

宣教師は、捕まれば処刑される危険をおかしてでも、潜伏する信徒達に会いに行きました。彼らの信仰を支えると同時に、「信徒の罪をゆるす」という聖務のためです。平戸では、1622年カミロ神父が捕らえられ、火あぶりで処刑され（田平・焼罪史跡公園）、神父をかくました信徒も、中江ノ島で処刑されました。殉教の地となった中江ノ島は、今もかくれキリスト教徒達が聖水を採取する聖地となっています。



人々は、表向きは仏教や神道を受け入れながら、密かにキリスト教の儀式も続けました。教会が壊され、密かな信仰を続ける中で、自然を対象とした古くからの信仰も行うようになります。安満岳を「お山さま」として拝むようになりました。家では、納戸にご神体（お掛け絵など）をまつり、「オラショ」をとなえ、組織で信仰を維持していました。

約200年鎖国政策を行っていた日本は、1854年に開国。潜伏キリスト教徒に対する欧米諸国からの抗議が相次いだこともあり、1873年、明治政府はキリスト教を禁止する高札を撤去、キリスト教は默認されるようになります。そして1889年に公布された大日本帝国憲法において、条件つきながらも信仰の自由が正式に認められました。それまで信仰を続けていた潜伏キリスト教徒達は、カトリックに復帰する人と、禁教期の信仰の仕方を守る人に分かれました。春日集落では、自分たちの祖先が守ってきた信仰をそのまま続けることを選びました。よってこの地に教会はありません。その代わりに、今でも禁教期と変わらない棚田の風景があります。

潜伏して教えをつないだ人、殉教した人、やむなく弾圧した人。自由のなかつた歴史を知ることは、痛みとともに、今の平和の尊さを感じさせてくれます。



オラショとは、ラテン語で「祈り」の意味。人々は、オラショを自分達と天にいる神をつなぐ道だと考えていました。

宣教師不在の間、ラテン語の意味はわからなくても、唱えることで神とつながることができたといいます。

解禁後もそれまでの信仰を続けた人を「かくれキリスト教徒」と呼び、禁教期にキリスト教由来の信仰を続けた「潜伏キリスト教徒」と使い分けています。

春日集落



（春日集落拠点施設）に立ち寄り、地元のおばあさん達がいってくれるお茶で、一服はいかがですか？

80代、90代でも元気なおばあさん達は、幼い頃、かくれキリスト教徒で洗礼を受けた最後の世代です。お茶に使われる水は、安満岳の湧き水を水源としたおいしい水です。また、おばあさん達の育てた野菜で作った手製お漬け物の、おもてなしも好評です。

「春日の人は、みな仲良し。先人たちから受け継いだこの場所を、子や孫が、残れる場所にしていきたい」との思いから、春日を盛り上げてくれています。



島の館

カトリックに復帰した地区では、信徒は、神父に禁教期の信心具を捨てるよう求められるなどしたため、当時のものが残っていることは少ないです。一方かくれキリスト教として、それまでの信仰を続けた集落では、当時の信心具が比較的残っています。島の館では、かくれキリスト教がキリスト教時代から継承してきた、オテンパンシャ、お掛け絵、メダイなどの信心具の展示見学や、オラショの録音を聞くことができます。他にも、捕鯨や定置網漁の仕組みを学べるエリアもあり、世界文化遺産以外の平戸についても学ぶことができます。



春日の棚田米を使った特産物



春日集落では、安満岳からのたえる事のない湧き水を使って、今も棚田で米が作られています。高い場所にある田ほど、気温差で美味しい米になると言い、より労力がかかる高台まで棚田が続きます。小粒ですが、味が濃く、美味しいのが春日の棚田米の特徴です。

この棚田米を使用することで、棚田の維持にもつながるようにと作られたのが「フィランド」という日本酒です。棚田のもち米と「かんころ」を合わせて作った「かんころ餅」という長崎の郷土菓子もあります。

「かんころ」とは、サツマイモを薄く切り、ゆでて干した「干し芋」のこと。平戸は、江戸時代に日本で最初にサツマイモを栽培したと記録されています（平戸英國商館長コックスの日記より）。



春日集落の周辺地域は、平戸の領主が布教を認めていた布教初期に、村ごとキリスト教徒に変わりました。そのため、移住して不便な土地に暮らした他の潜伏キリスト教徒とは違い、稻作ができる、豊かな土地にあります。丸尾さま（山）に登れば、棚田を一望でき、奥に安満岳を眺めることができます。棚田散策後、「かたりな」

（

春日集落拠点施設）に立ち寄り、地元のおばあさん達がいってくれる

お茶で、一服はいかがですか？

80代、90代でも元気なおばあさん達は、幼い頃、かくれキリスト教徒で洗礼を受けた最後の世代です。お茶に使われる水は、安満岳の湧き水を水源としたおいしい水です。また、おばあさん達の育てた野菜で作った手製お漬け物の、おもてなしも好評です。

「春日の人は、みな仲良し。先人たちから受け継いだこの場所を、子や孫が、残れる場所にしていきたい」との思いから、春日を盛り上げてくれています。



定置網漁師体験



平戸では、「本物」の漁師さんの船に乗り、定置網の漁師体験ができます。通常の漁と同じ、早朝に出発し、網を引けば、アジ、イサキ、ブリ、イカ、シイラなど、大小さまざまな魚がかかっていて子供達は大歓声。「魚はスーパーで寝てる」とと思っていたような子供達にとって、「本物」との出会いは、大きな感動体験になります。漁の後、水揚げした魚をそのまま朝食にいただければ、その味に今度は大人達が大感動。内容の濃い3時間になること間違いなしです。事前に希望すれば、漁船で中江ノ島を周遊することも可能です。



黒島

戦国時代、大村純忠が、日本で最初のキリスト教徒となり、大村氏の領地でもキリスト教への大規模な一斉改宗が行われました。

しかしまもなく、日本は禁教の時代へ入り、この地でもキリスト教弾圧が行われます。厳しい弾圧の中、大村城下では信仰が消えて行きましたが、外海地域では多くの住民が、密かにキリスト教徒を続けていました。

斜面地が多く、稲作ができる土地が多い外海地域では、サツマイモの栽培を多く取り入れ、人々の命を支えました。

江戸時代後期、この地域の人口が次第に増えて困っていた大村藩は、開拓して農地を増やしたい五島藩と話し合い、大村藩の外海から五島藩への移住が進められることになりました。移住を決めた人の多くは、潜伏キリスト教徒でした。

その頃、外海から五島へ向かう途中にある黒島では、以前からあった平戸藩の牧場が廃止され、開拓者を受け入れていきました。移住者は、このような黒島に目をつけて移住し、自分たちの信仰を守りました。彼らは、海から吹く強風から家を守るために、育ちが早く、大きくなるアコウの木を防風林として植えました。畑には、サツマイモや麦が植えられました。島地区では、斜面地に広がる潜伏期から変わらない風景を見ることができます。

黒島では、毎年、庄屋屋敷(平戸藩の出先の役所)で絵踏を行いました。踏絵を踏んだら、仏教徒であると見なされ、罰せられることはありませんでした。潜伏キリスト教徒は、興禪寺に子抱観音を密かに置き、マリア観音として拝んでいました。



田畠を開拓する
移住者がほしい!

五島藩



その頃、外海から五島へ向かう途中にある黒島では、以前からあった平戸藩の牧場が廃止され、開拓者を受け入れていきました。移住者は、このような黒島に目をつけて移住し、自分たちの信仰を守りました。彼らは、海から吹く強風から家を守るために、育ちが早く、大きくなるアコウの木を防風林として植えました。畑には、サツマイモや麦が植えられました。島地区では、斜面地に広がる潜伏期から変わらない風景を見ることができます。

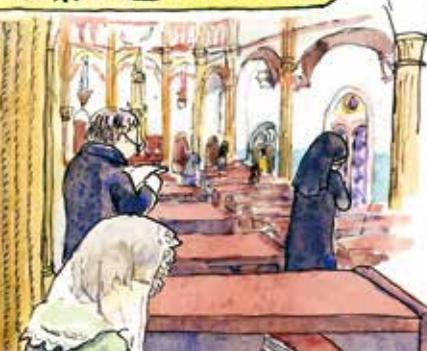
黒島では、毎年、庄屋屋敷(平戸藩の出先の役所)で絵踏を行いました。踏絵を踏んだら、仏教徒であると見なされ、罰せられることはませんでした。潜伏キリスト教徒は、興禪寺に子抱観音を密かに置き、マリア観音として拝んでいました。



幕末、日本が開国すると、長崎に外国人のための教会(大浦天主堂)ができ、浦上の潜伏キリスト教徒たちが信仰を告白しました(信徒発見)。その知らせを聞いた2ヶ月後、黒島の水方(潜伏キリスト教徒の指導者)の出口大吉は長崎に出向き、ブティジョン神父に信仰を告白します。その際、黒島で行われてきた洗礼に必要な文書が抜けていて、洗礼が無効だったことがわかりました。戸惑う黒島の人々に、ブティジョン神父はキリスト教の教義を学ぶことを勧め、理解した者から洗礼を授けていきました。そして明治に入った1872年、黒島の潜伏キリスト教徒たちは、全員がカトリックとして再洗礼を受け、弾圧の危険を冒して、黒島最初のミサが出口家で密かに行われました。

翌年キリスト教が解禁されると、ミサが行われた出口家は仮の聖堂となりましたが、やがて、人が集まりやすい中心地に初代の教会堂が建てられました。その教会も手狭になり、1902年、マルマン神父が設計し、信徒たちの労働奉仕と献金で完成したのが、現在の黒島天主堂です。黒島のような小さな島に、国内屈指の教会建築として高く評価される天主堂を建て得た原動力は、洗礼が無効と告げられても諦めることなく、逆に奮起の力へと変え、信仰を自らの力で復活させた、黒島の信徒の歓喜だったと想像されます。

十字架の道行の祈り



5:50、黒島天主堂の鐘が鳴り、ミサが始まります。島民の約8割がカトリック信徒の黒島では、天主堂で祈りを捧げるのが、毎朝の日課になります。「用事で朝のミサに参加できなかったりすると、1日気持ちが落ち着かない」とは、熱心な信徒さん。子供の頃から、早朝真っ暗な中を教会に通い続けた習慣が、今も染みついていると言います。

毎週金曜日には、ミサの後に「道行の祈り」を捧げます。昔、黒島で伝染病が流行った時に、この祈りを捧げたところ収束し、祈りをやめると、また病気が出る、といいう事をくり返したことから、人々は「道行の祈り」には奇跡を起こす力があると考えました。当時の信徒とペルー神父は、踏絵を踏んだ先祖たちの過ちも、その奇跡の力で許されるのではないかと考え、「道行の祈り」を捧げることに決めたといいます。

「道行の祈り」には「絵踏の贖罪」の意味を込めるのは、黒島だけだと言われています。天主堂隣の黒島教会資料室には、ペルー神父設計の初代教会堂に掛けられていた「十字架の道行」の「留」が展示されています。現在の天主堂の「留」と比べてみると、同じ場面でも描かれ方に違いがあることがわかります。

「留」とは、イエス・キリストが死刑宣告されてから埋葬されるまでの受難の道のりを14の場面に分けて、絵や彫刻で表したもの。カトリック教会の壁に掛けられています。

【十字架の道行の祈り】
ひとつひとつの「留」を順次たどつていて祈ること。



ふくれまんじゅう作り体験



黒島天主堂近くに住む藤村さんが教えてくれる、ふくれまんじゅう作り。こだわりは、生イーストを使うこと、手作りのあんこを使うこと。塩も砂糖もおまじない程度のひとつまみしか入れないので、生地は、ふんわりと膨らみ、自然な甘みが広がります。ふくれまんじゅうの下にしつけられたサツマサンキライの葉は、黒島が北限の自生地です。ミサや家族の事、昔話など、おしゃべりしながらの作業は、あつという間。できたての、ふくれまんじゅうは、丸くて、かわいらしく、やさしい味わいです。



黒島二味とうがらし・ラー油



最盛期には、段々畑が広がり、田んぼも多くあった、黒島。戦後、島外から、安い米や野菜が入ってくるようになると、農業をやめる人が増え、畑から森林へと変わっていきました。加えて、島にいなかったイノシシが、海を泳いで来て、畑を荒らすようになり、さらに畑をあきらめる人が増えていきます。そんな中、興禪寺のご住職が中心となって、イノシシが荒らさない唐辛子を栽培して、島の特産品作りを始めました。畑を耕す「農産部」2名とラー油、二味唐辛子を作る「製造部」3名の女性による、島の新しいお土産。唐辛子は連作ができないため、畑を毎年移していくことで、少しづつ段々畑を取り戻して、世界文化遺産の島、黒島の景観をよみがえらせている手助けとなっています。

禁教期、潜伏キリスト教徒に仏教徒が干渉しない形で共存してきた、黒島。今は、唐辛子作りをカトリック教徒が手伝ったり、黒島天主堂のクリスマス礼拝に仏教徒も参加したりと、協力して、島を盛り上げています。

「花のように、きれい!」という赤い唐辛子の実る様子が見えるのは、8月~10月頃。
ガイドさんの案内で島を回る方は、ぜひ、畑にも注目してください。

賀值小

古くから、遣唐使船が寄港する、海の要所であった、五島列島。中でも小値賀は、良港となだらかな土地に恵まれて、古代中世を通して栄え、当時の遺跡、遺物が多く見つかっています。

戦国時代、平戸松浦氏の家臣でキリスト教に改宗した籠手田氏の領地だった納島を中心として、キリスト教への改宗が進みましたが、禁教期に入ると、平戸藩の弾圧によって、キリスト教は途絶えてしまいます。



明治に入り、キリスト教が解禁されると、信徒たちはカトリック教会に復帰して、舟森には瀬戸脇教会を、野首には野首教会を建てました。現在、残っている旧野首教会は、3代目の教会になり、鉄川与助によって設計されたものです。急勾配の土地に、石垣を積んで作った小さな段々畑では、サツマイモ、麦、野菜が作られ、小船で漁に出るという、半農半漁で自給自足の暮らしをしていました。また、野首と舟森に、1週ごとに神父が駐在し、その期間は、子供達も毎朝、毎夕、教会に通い、祈りをささげたといいます。

しかし、昭和の高度経済成長期に入り、ガスや電気の暮らしが中心となると、現金収入が必要となり、島を離れる人が増えます。人が減った野崎島では、それまで3校あった小学校が1校に統合され、小さな子に片道2時間もの山道を歩かせるのに忍びないと、さらに村を出る若い世代が増えました。そして、1966年に舟森集落、1971年に野首集落の人達が集団で島を離れました。信徒たちが、強い思いで資金を集め、レンガを運び建てた念願の教会堂でしたが、祈りを捧げる人の姿は、今は見ることができません。



島崎山予

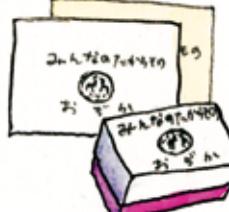
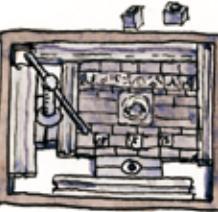


世界文化遺産となった「野崎島の集落跡」ですが、小值賀本島から町営船で野崎港に上陸して、ガイドの案内で島めぐりをすることができます。急斜面に石垣を築いて畠や家を作った跡を見たり、潜伏キリシタン時代やそれに続くカトリック復帰後の墓などを見ることで、人々が暮らした土地の記憶をたどることができます。



人がいなくなった野崎島では、ニホンジカが数を増やしていて、あちらこちらで出会います。増え過ぎたシカによって、森林が減り、土砂が露出して海へと流れ込み、自然環境への影響が心配されています。

現在、最後の学校であった野崎小中学校校舎を、「自然学塾村」として宿泊施設にしており、島に泊まることもできます。海水浴場もすぐ側です。



キリスト教を保護した織田信長が、本能寺の変で自害する約半年前、大村純忠を含む九州のキリストン大名たちは、自分たちの名代として4人の少年をローマへ派遣しました（天正遣欧少年使節団）。帰国した使節団が持ち帰ったものの中に、グーテンベルクによって発明された活版印刷機がありました。



崎島の昼食は、小値賀本島で
入っていきましょう。



地域おこし協力隊として東京から小値賀にやってきた小島さんは、任期終了後、島民待望のパンました。潜伏キリストンの地そのものに練りこんだ、地元の生産者が心を込めて紫芋など)をアレンジしたパンがひっさきりなしに訪れたい、と6時30分に開店。にも、調達することができ

古民家レストラン「藤松」の料理長、遠山さんは、小値賀の斑島育ち。中学卒業後、すぐに料理人の修行に入れられ、料理の道一筋。2015年に故郷、小値賀にUターンしました。地元の季節の食材を使用し、直接お客様の喜ぶ顔が見える、今の生活を幸せだと感じています。故郷に貢献したい、という気持ちで開発した棒寿司は、5月～10月にのみ獲れる一本釣りのイサキ（値賀味）を使った新しい特産品です。棒寿司は5月～10月限定の不定期販売で、小値賀港フェリーターミナル売店で販売しています。出会えたらラッキーな商品です。